

4. 川と文化人

4-1: 歌人・詩人 — (宮崎県教育委員会教育研修センター: 伊藤一彦先生)

耳川の流域からは若山牧水や小野葉桜など、歴史に残る歌人が生まれています。また日向にはいろいろな文化人が訪れています。

(1) 若山牧水

若山牧水といえば、日本を代表する歌人です。その作品は多くの人々に愛され、口ずさまれています。

[4-1-(1)]

幾山河越えさり行かば寂しさの
終てなむ国ぞ今日も旅ゆく
白鳥は哀しからずや空の青
海をあをにも染まずただよふ

日本の名歌といわれる作品です。この名歌をつくった牧水は、東郷町の坪谷に明治18年に生まれました。今日でも保存されている生家の前には美しい溪流、つまり坪谷川が流れています。牧水は「おもひでの記」のなかで次のように書いています。

「家は村を貫通する唯一の道路に沿ひ、真下に溪に臨んで居る。そして恰度その溪は其処まで長い滝の様になつて落ちて来た長い長い瀬が、急に其処で屈折して居るために其処だけ豊かな淵となり、やがてまた瀬となつて下り走り、斜め右と左とに末遠くその上下の溪を展望する事ができる地位にある。」

牧水の家は川を楽しむのにじつに良い場所に立っていたのです。少年時代の牧水はこの坪谷川で魚をつかまえ、夏は泳ぎました。そして、川のむこうには尾鈴山が見えました。牧水は晴れた日の尾鈴山も好きでしたが、雨の日の山の眺めがとくに気に入っていました。雲のかかった山、雨のために小さな滝のできた山を倦きず眺めていたそうです。

牧水の生家



若山牧水

牧水は心から水を受した歌人でした。牧水は本名を繁しげるといますが、ペンネームの牧水にはちゃんと「水」の字が入っています。

「私はものごころのつく頃からいた痛くこのたに溪と山の雨とを受した。で、歌の真似などを始め出してがごう雅号というものを使ふ様になると先づうざん雨山と称したものであつた。白雨とも云つた。現げんに使つてみる牧水といふのも当時最も愛してつなみたものの名二つを繋ぎ合わせたものである。牧はまき、即ち母の名である。水はこのたに溪や雨から来たものであつた。」

やはり「おもひでの記」の一節です。牧水はふるさとの川、ふるさとの水に、身も心も育てられました。日本を代表する歌人となった牧水の文学者としての豊かな感性かんせいの奥底おくそこには、ふるさとでの自然体験があるのです。ですから、牧水自身、ふるさとの川や山のことを一生忘れず、繰り返し歌ったり、書いたりしています。

ふるさとの尾鈴おすずの山のかなしさよ 秋もかすみのたなびきて居り

歌集『みなかみ』に収められている、28歳の時の作です。父の病気のため、東京からふるさとに帰ってきた時に歌いました。「かなしさ」は「悲しさ」と「愛しさ」の両方です。

あたたかき冬の朝かなうす板の ほそ長き船に耳川くだる

歌集『砂丘』の作で、父の病気のためふるさとに帰ってきた翌年の作です。たよりないように見える船を楽しみながら、耳川をなつかしんでいる気持がよく出ています。

幼き日ふるさとの山に睦むつみたる 細溪川ほそたにがわの忘れぬかも

歌集『さびしき樹木』に収められている、33歳の時の作です。幼い時に親しんだ山や川が忘れられないと歌っています。このころ東京に住んでいた牧水は心が寂さびしい時にはよくふるさとを思つては自分を慰なぐさめました。

ふるさとの日向の山の荒溪あらたにの 流清うして鮎す多く棲みき おもほへば父も鮎をばよく釣りき われも釣りにきその下つ瀬に 鮎焼きて母はおはしきゆめみでの 後もうしろでありありと見ゆ

牧水が昭和3年に世を去った後に出された『黒松』の中の歌です。ふるさとの川で父といっしょに鮎を釣ったこと、母がその鮎を焼いてくれたこと、その母の後姿まではつきりおぼえていると歌っています。そんな光景を夢にまで見たのです。牧水の心の中にずっとふるさとがあったことがよく分かります。

若山牧水記念公園(東郷町)



(2) 小野葉桜

小野葉桜は若山牧水とちがって歴史のなかに埋もれて忘れられていた歌人でした。しかし、昭和62年に遺稿歌集『悲しき矛盾』が出版されて、その悲劇の人生と優れた作品に大きな注目が集まり、今ではよく知られた歌人になりました。

【4-1-(2)】葉桜は西郷村の田代に明治12年に生まれました。耳川のほとりの家です。向学心の強かった葉桜は小学校を卒業すると、延岡の学校に勉強に行きます。その後、美々津小学校や田代小学校の代用教員をしていましたが、さらに勉強するために上京しました。しかし、日露戦争が始まり、勉強を中断して帰らざるを得なくなりました。

葉桜は西郷や美々津でいろいろの事業や社会活動を行い、郡会議員にも若くして選ばれました。しかし、事故のため病気となり、議員を辞職せざるを得なくなりました。また不幸が起ったのです。

仕事ができなくなった葉桜は妻の収入に頼って暮らすようになりました。そのことを申しわけない、情ないと思う葉桜は10代のころに親しんだ短歌の創作にはげみます。じつはそのころから若山牧水とは文学上の親友でした。

狂ほしきまで心地よき夕べかな

渚に雨のふり消ゆる音

濃きむらさきに波立てる海よ

冬の陽のあまりに明るし我が窓のまへに

ぼんやりと暮れかかる海に向ひ居れば

母の懐ろが恋しくなりけり

葉桜が美々津の海岸を歌った作品です。雨の海を好み、明るい海はまぶしいと歌っています。そして、海にむかっていると、ふるさとの母が恋しい、と。



初冬の山路さびしみ一夜ふた夜
母待つ家に寝にかへるなり
久しぶりに家にかへりて
父上の墓前にちつと目を瞑ぶり居り

葉桜は耳川のほとりのふるさとを愛し、耳川の流れ出ていく美々津の海岸を一生愛した人でした。葉桜の短歌創作は病気の悪化のため短い期間でしたが、その悲劇の人生から生まれた作品はいま多くの人の心をとらえています。

どどと狂ひて岩窟に浪はまきかへる
かくあれかくあれこころおびえず

『悲しき矛盾』の終りにある一首です。私たちに勇気をあたえてくれる歌ではないでしょうか。



(3) 高森文夫

高森文夫は東郷町に生まれた優れた詩人です。そして、日本的に優れた詩人であるのにその業績はまだ十分に知られていません。本人が自分の詩業を語らず、東京から遠く離れたふるさとで生活していたためです。今後の顕彰が待たれている詩人です。

【4-1-(3)】高森文夫は明治43年の生まれです。同じ東郷町出身の若山牧水とは25歳ちがうということになります。少年時代から文学に熱中し、延岡中学(今の県立延岡高校)を卒業すると、上京して成城高校に入学します。そして、ふとしたきっかけで詩人の中原中也と出会い、フランス文学をすすめられて、東京大学の仏文科に入学します。大学卒業後は母校の延岡中学の教壇に立つなどしていましたが、昭和12年に第1詩集『浚渫船』を出版しました。この詩集には名誉ある第2回中原中也賞が与えられました。第2次世界大戦の激化していくなか、昭和19年には召集となり、満州の部隊に入隊しました。敗戦後はシベリアに送られて収容所で苦しい強制労働の日々を過しました。日本に帰ることができたのは昭和24年でした。

戦後は宮崎県教育委員、延岡市教育長、東郷町教育長、東郷町町長などの要職にありましたが、その清廉な人格は全幅の信頼を置かれていました。もちろん、戦後も詩人としての心と志を失わず、昭和43年には第2詩集『昨日の空』、平成2年には全詩集と言っていい『舷灯』を出版しています。惜しまれながら平成10年に亡くなりました。

現代を代表する歌人で中原中也研究者である福島泰樹さんがいま高森文夫に関心を寄せ、多くの文章を書き、注目を集めています。

最後に、高森文夫がふるさとと牧水について述べた文を引いておきます。

「昭和13年、牧水の没後10年目に出版された牧水最後の歌集『黒松』を私が手にしたのは旧満州国新京の空の下であった。満蒙の荒涼たる乾燥地帯の明け暮れに、いつも慕わしく思い出されるのは四季それぞれの風情をもって降る日本の雨の音であり、枕に通うのは故郷のわが家のすぐ裏を流れる耳川の昼夜を分かつたぬせせらぎの響きだった。

そんなとき行きつけの本屋の店頭で見つけたこの歌集は、まさに遠く離れた故国の懐かしい雨の訪れのように思われた。ことに「ふるさとの日向の山の荒溪の流清うして鮎多く棲みき」に始まる牧水が遠い少年の日を懐かしんで歌った一連の「鮎釣りの思ひ出」の歌は、そのまま私自身の少年の日の思い出であり、『くろ土』から『山桜の歌』を経た牧水の闊達自在な歌声に、私は夏の日の夕立の雨に心身を洗われたような爽快さを覚えた。」(『満州の空の下で』)

散歩路

遙けくも われはきにけり

朝夕を 通ひなれたる

吾子とゆく この散歩路

あかねさす 夕焼の空

黍の穂の 色も熟しぬ

吾子とゆく この散歩路

朝夕を通ふ 細徑

遙けくも われはきにけり

吾子の背を かくすばかりに

茂りたる 千草八千草

愛しさの つともせまりて

赤まんまの 花手折りやる

遙けくも われはきにけり

吾子とゆく この散歩路

あかねさす 夕焼の空

『散歩路』(高森文夫詩集「昨日の空」より)

4-2: 耳川の流域を訪れた文化人

郷土の歌人のほかにも、自然の美しさや豊かさにひかれて、この美々津に来た詩人や民俗学者たちがいきました。

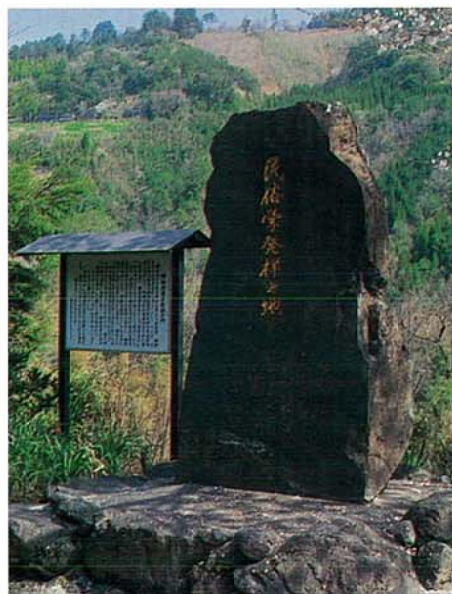
(1) 柳田国男

柳田国男は民俗学の創始者といわれ、明治41年に椎葉村を訪れ、椎葉のようすを作品で広く紹介しています。

【4-2-(1)】: 民俗学の基礎を築いた柳田国男は、明治8年に兵庫県に生まれました。明治41年に椎葉の村を訪れ、狩猟を中心とした椎葉の生活民俗を記録した『後狩詞記』をまとめ、この本が日本の民俗学研究の最初の本となりました。その『後狩詞記』に柳田国男は次のような短歌を記しています。

立ちかえり又みみ川のみなかみに いほりせん日は夢ならでいつ

耳川のみなかみの椎葉をもう一度また訪れたいという歌です。



柳田国男の顕彰碑

(2) 中原中也

中原中也は30才という短い生涯の間に、東郷町山陰を3度も訪れています。

【4-2-(2)】: 近代の代表的な詩人で、その詩が今日も広く愛され読まれている中原中也は、明治40年に山口県に生まれました。中原中也は東郷町を3度訪れています。それも昭和7年、9年、11年と集中的にです。文学上の親友である東郷町の高森文夫を訪ねてでした。2人は東京で知りあい、熱く文学を語りあう仲間でした。中原中也は夏休みに故郷の山口に帰った時に、わざわざ宮崎まで足を運んだのです。中原中也は高森文夫が後に詩集『浚漈船』を出版した時、紹介文を「四季」に記していますが、その中に次のような一節があります。

「僕は高森のことを想ふと、いつも一匹の美しい仔熊を連想する。今日も彼は紺の背広を着て熊のやうにしづしづと南国の夏の町を歩いてみるのであらう。」

(3) 野口雨情

野口雨情は茨城県出身で、大正中頃の民謡・童謡作家です。「城ヶ島の雨」「波浮の港」「十五夜お月さん」「はとぽっぽ」などの歌は今も有名です。

[4-2-(3)]: 雨情が日向市を訪れたのは、昭和17年4月です。宮崎県下の雨情の民謡をたどり、列記すれば、次の通りになります。「高千穂町」「岩戸町」「延岡小唄」「延岡」「日向音頭」「富高歌謡」「美々津」「日向炭焼節」「真幸村歌」「小林」「小林にて」「原町」「高原」「宮崎」「都城小唄」「飢肥」「ペンコ節」「油津」などの作品です。

雨情の詩作ノート「旅の風草」に「美々津」と題する作品の一節を紹介します。

日向灘から朝日がのぼりや
千里奥山夜があける
日向美々津は船出の遺蹟
ここは海軍発祥地



他に、第一回文化勲章を受章した、佐佐木信綱をはじめ、木下利玄、川田順などの歌人が耳川流域を訪れ、作品を残しています。